

「保安大を受験・入学」の 想い出

阿部 順治 陸自57

編集委・防衛大学校第1期生会は、毎年、同期生会の『会報』を発行しておりましたが、令和元年6月の第39号をもって終了したと伺いました。今回、最後の『会報』の中から、阿部様の記事を、ご本人と関係者のご了解を得て転載させていただきます。

はじめに

今春4月10日、防大本科67期生が入校し、各学生が「防衛を担う決意を胸に」新生活をスタートした。我が身を顧みると遙か遠くとも思えるが、楽しい想い出もある。先日、富士駐屯地行事において中堅幹部数名と懇談の際に「私達50期生代からみると久里浜時代は雲の上で神話みたい」に思える。先輩は「戦後の混乱期に、どうして受験し、入校したのですか」と質問された。これまで県人会などで何度か質問され話題になることもあった。そこで65年前の想い出を振り返ってみる。

1 受験

四国(徳島)の田舎の高校生であるので、昭和27年8月に保安大学校が創設され学生募集があることなど全く知らなかった。高校同クラスの友人E君が親戚の海兵出身者から勧められて、募集要項、受験書類を取り寄せたので見せられた。

グループ仲間と相談し、E君の受験に、冷やかし組(AとF君)の2人が同行することになった。理由は①工学部系試験科目であること、②受験料が無料、③高校は公休になる、④宿泊は親戚があり無料、⑤帰りに善通寺、琴平宮を参拝できるなど、遊び半分だった。



受験前、善通寺駐屯地正門前

第一次試験は昭和27年11月24日、25日善通寺駐屯地の隊員食堂にて行われた。試験内容5科目で、冷やかしの二人には国立大工学部電気工学を受験予定で勉強していたので易しく感じた。時間が余り、早めに提出。退席して会場内の写真を撮った。初

日終了後は四国75番札所善通寺に参拝して、本命の国立合格を祈願した。一次合格は我が高校から、受験7名、合格2名(ただしF君は辞退して国立へ)、私のみ二次試験へ参加することになった。



試験中、早期退出



受験後、善通寺参拝

第二次試験は11月24、25日久里浜駐屯地との通知をいただき、前日に久里浜会館に宿泊した。翌朝、久里浜駐屯地の営門を何となく不安な気持ちで通過して身体検査、体力検査、面接など受けた。まだ私も冷やかしかつ自分のままで、身体・体力検査だけは自信をもってクリアーし、面接も

「尊敬する人物」、「最近の読書」などに軽く思いのままを述べて、最後の「本校、国立大とも両方合格したらどちらに進むか」との質問に「まだ決めていません。国立に行くかも知れません」と正直に答えた。それでも合格したから、思想信条などは厳しくその他はおおらかでのんびりしていたのだと思う。

その後国立大学1期校の受験勉強もして、願書も提出してそちらの準備も完了していた。保安大学校の合格発表が昭和28年2月28日に発表されて徳島新聞に掲載された。(応募者総数1万2923名、倍率32倍と注目され、徳島県内から5名が合格で話題となった(注:そのうち4名人校し、卒業は1名のみ)。

2 進路選択

さてどちらに進むか決めねばならぬ。何が決め手か、将来性などと両親と話した。主要な考慮事項は①本人の志望・専門に合致するか? ②これはいずれも電気工学専攻で○。③家庭、経済的に制約あるか? 国立大学へはなんとか送り出される。保安大なら半額以下で済む。これはいずれも○。④軍隊は訓練、しごきがあるが体力・気力が耐えられるか? これは健康で運動(マラソン、剣道)

をしているから平気だ。④問題は軍人として死を覚悟して仕事する。また全国へ転勤があり郷里には帰らぬがいいか？ 私自身は危険を顧みず仕事は出来る。居住はこだわらぬ。むしろ北から南まで行きたい。父からは本人の覚悟が一番だ、長男だからといって家にこだわるな。母は本人の好きにしないさい。3人いずれも可となり。未だ誰も見たことない「まぼろし」に向かうこととなった。しかし、⑤最大の決め手は、「1期生であり、上級生はいない、好きなことが出来る。しかも最年少（4月1日生まれ）であり、楽しくのびのびやれそうだ」と勝手に想像して、保安大への夢に賭ける決心をした。

3 1期生の多様性

昭和28年4月1日、久里浜駐屯地内の仮校舎で開校、4月6日に学生が着校した。私は2日前の午前に小松島港（徳島）から関西汽船に乗り、約6時間かけて天保山港（大阪）に到着。夜行列車で大船へ、そして久里浜会館に泊まり、翌朝に入校した。18歳5日となったばかりだが、今考えると一人前の大人であり、かつ幼い面もあったろう。着校以来最も驚いたことは規律、生活環境、食事、団体生活などでなく、同期生となる

400名の個性の多様さ、年齢、出身地域（外地）、学歴（受験歴）、職歴（部隊歴）、趣味・特技など多分野で様々な勇士が集まったと、下から目線で見上げて、注目して見守った。

◎出身地が全国なのは当たり前だが九州からが多く（卒業生112名）、元氣な九州弁に圧倒される。外地からの引き揚げ者もいたようだ。都内の高校から（卒業生37名）来た人は皆さん貫禄があり、標準語でなく東京弁みたいで大人だ。

◎年齢は最年長昭和5年生まれ（自衛官からは23歳まで）から最年少昭和10年4月1日まで5歳差があり、浪人された方も多く、分布が広い。

◎学歴は高校卒業で同格だが、出身高校が都内有名高校から四国の無名高校までレベル格差も大きく、また有名な大学受験の経験の有無もある。他有名大学を合格したが、家庭事情でこちらへ来た方もある。まさに学力差は極めて大である。

◎職歴も多様で田舎からストレートもいるが、既に予備隊から保安隊勤務4年で二等保安士補の方もおられる。まさに大人と子供の違いを感じた。喫煙・飲酒は当然で、女性のお話は想像外だ。

◎思想も様々で田舎者は素朴・保守だが、革新センスをちらつかせる

大人もいる。我らは黙って聞くだけだ。リベラルと自認する人もあり、多種混在だった。

◎家庭環境も様々で高級官吏の息子もいれば都内の実業家などの息子もおり、また田舎の商家・農家育ちもおり、それぞれ混在していて多様で面白い。

◎これらを総合して考えると、S君は保安隊出身で5歳年長の大人、K君も部隊出身で酒、タバコを嗜み、時に女性関係の話を本当か嘘か語る。子供は黙って聞くばかり。

都内有名高校出身で有名大を受験しつつ浪人されたT君など格上の社会人と思われた。その他数えられない多種多様でユニークでバラバラの人達であると感じた。しかし「1期生」と一括するとまとまった進取の気性もあふれた豪傑集団となり、仲間意識とパワーを発揮する。だからこの両面を正しく理解しないと、1期生を語れない。

これらの多くの同期生のうちの一人として、激動と不安の久里浜生活が始まった。

4 入学式

4月8日入学式で横校長は、訓示で「民主主義の理解と指揮官としての修養錬成」について、明快に示さ

れた。私は「後半の指揮官としての修養錬成」だけは努めなければ部下に申し訳無い。成績などより、これだけは本気でやると決めた。

だが、授業が始まれば、みんな同級生で共に学び、上下感は無く、一緒に語り、遊んだ。

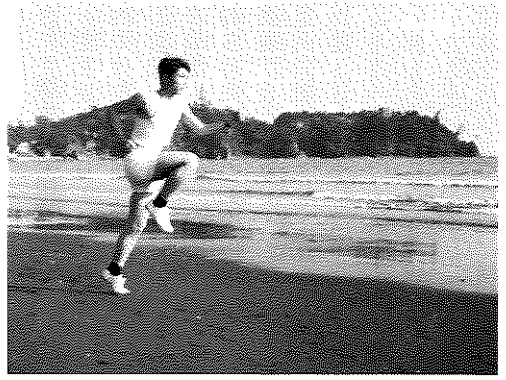
5 生活規律

着校数日は戸惑いがあったが次第に慣れて、何とか集団生活が始まった。私自身は準軍隊生活なのだから、こんなものと内務規則に適應したが、「平日は外出禁止」だけは我慢出来なかった。

それで課外にはランニング・スタイルで衛門の警士さんに「ロード・トレーニンングに行つてきます」と声をかけて申請して出入を黙認していただいた。平日夕刻は1〜2時間以内だが、久里浜海岸・ペリー公園から東は浦賀・愛宕山公園など、西は野比・尻こすり坂などランニングして体力向上と気分転換を図った。

土・日は「マラソン練習ですから帰りは夕方になります」と予告して遠出した。土・日は天候、体調を見計らって、逗子、鎌倉、江ノ島海岸ランニングを自在に楽しんだ。

半年後、小原台が新校舎候補地となつてからは工事中も何度もランニ



江の島海岸ランニング

ング偵察に行き、進捗状況を独り楽しんで。

だから保大・防大に外出制限があるとは在学間にあまり感じなかった。

6 入校初期の訓練

4月8日入校・任命式が終わるやいなや直ちに入校訓練が開始され約1カ月続けられた。担当された20数名の指導官は横山登様ほか全国から選ばれて、優秀かつ人格者で、準備周到かつ熱心に指導された。一方、学生はこれまで受験勉強ばかりに専念してきた方にはきつい、嫌だと感じられたようだった。高校で運動部に経験者には苦になるほどで無く、特にランニングが得意な者には駆け足

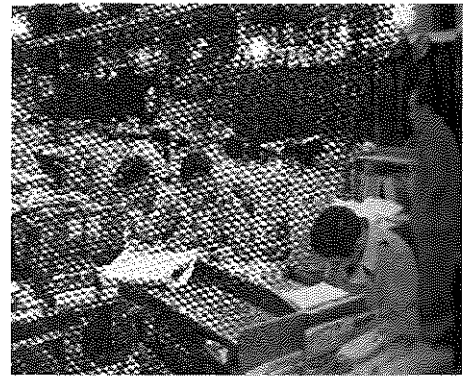
など楽にこなせたようだった。この訓練の想い出は60年を経過して今なお、好き・嫌いの個人差が大きい。



総数33名、逝去・不明11名、健在22名
小隊指導官 横山登（前列中央）
「それぞれ強い個性の集団、されど愉快的な面々」

7 愛国心、リーダーシップなど軍人魂の涵養

当時の社会情勢、入学動機など多くの要因で、在校生の大多数は愛国心、使命感、武人の心構えなどについては白紙の状態だった。これらの学生（私も含めて）が卒業までに一人前の幹部候補生となったのだが、その芽生えは入校訓練を担当した20数名の訓練指導官の熱意と周到な準備、さらに立派な人格による感化が成功要因と考える。訓練・休憩時間さらに課外など機会あるごとに各学生に親しく指導し、対話し、論ず交流は私達に自ら考えながら正しく誘導されたと思う。後日聞くところに



狭い学生舎、されど楽し

よると、全国から優秀幹部を选拔し、数次の特別教育を行い、細心の注意を払い、指導に当たられた。教官方も誠心誠意をもつて学生と対話した。

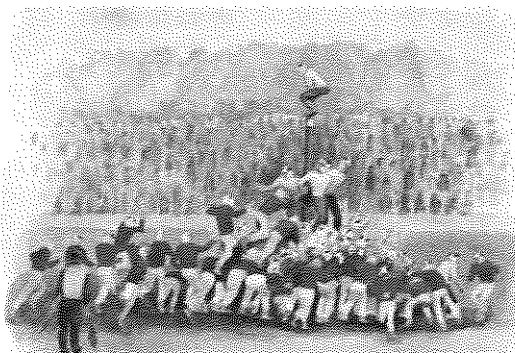
この為危惧された入校訓練が順調に行われて成果を挙げた。これにより、各中・小隊指導官との交流は卒業後も、終生続けられたことも多い。

おわりに

終戦後から問のない昭和27、28年の世論、風潮は反戦、革新など混乱期だったが、田舎育ちの高校生はのんびりしており、左翼かぶれもなく、自然の流れで久里浜まで到着したと感じが素直な想い出である。神代

学生もいた。ただ入学の決め手であった「①上級生はいない、好きにやれる、②最年少だから気楽だ」は正解であり、「第1期生」の有難味は学生間のみならず、部隊勤務間もそのペースを変えず、現在まで60余年間も「マイペースを発揮」出来て（許されて）幸いであった。この間、上司・先輩からは親身な指導をいただき、同期生諸兄にも親しくご交誼をいただき、感謝すると共に今なお畏敬の念は忘れない気持である。

なお、本年度に久里浜に「保安大 学校開校之地」の記念碑が建立されると聞き、感慨深い思いである。



伝統の「棒倒し」